



❖旧吉田家住宅主屋

建築年代：明治 28 年
 建築面積：156 m²
 形式：木造平屋一部 2 階建、瓦葺
 指定：国登録有形文化財（建造物）
 旧城下町の階段状敷地の下段に建ち、居間部と客間部を矩折（かねお）れに接続し両棟から前庭を望む。客間は端正な意匠の書院で要所に黒柿や棕櫚（しゅろ）などの銘木を用いる。居間部西寄り 2 階に配する座敷は埋れ木などの珍木も多用し、中国趣味を加味した独創的な意匠とする。（文化庁 HP）



❖紫雲閣

現在修理工事のため非公開

建築年代：明治 28 年
 建築面積：48 m²
 形式：土蔵造 2 階建、瓦葺
 指定：国登録有形文化財（建造物）
 主屋北西上段に建つ 2 階建の座敷蔵で、ベランダ風の下屋を矩折（かねお）れに付す。二階座敷は軸部を赤色系の磯草模様仕上げ、床柱と落掛に龍彫刻を巻き、鏡天井は円形に縁取り、赤漆で仕上げる。中国趣味を取入れ、多彩な工芸技術を駆使した、意匠奇抜で類稀な建物。（文化庁 HP）

❖貸館のご案内

文化伝承館は、各種会議や研修の会場としてご利用いただけます。
 また、和風建築を活かした写真撮影会場としてもお使いいただけますので、ぜひご利用ください。
 ご希望の方は、三春町歴史民俗資料館まで事前にお問い合わせの上、使用申請書を提出してください。
 使用料：大広間 1 時間 500 円、その他の部屋 1 時間 300 円
 ※暖房をご利用の際は 1 時間 250 円が別途かかります。

❖三春町文化伝承館

住所：福島県田村郡三春町字大町 82
 開館時間：9 時から 16 時 30 分まで（入館は 16 時まで）
 休館日等：月曜日・祝日の翌日（月曜日が祝日の場合はその翌日が休館）※冬期休館があります。（詳細は三春町歴史民俗資料館 HP 参照）
 入館料：無料
 駐車場：専用の駐車場はありません。三春交流館「まほら」駐車場（徒歩 5 分）、公共施設駐車場（徒歩 10 分）をご利用ください。



■お問合せ

三春町歴史民俗資料館 TEL0247-62-5263 FAX0247-62-6953
 HP：<https://www.town.miharu.fukushima.jp/site/rekishi/>

主屋



三春町文化伝承館 旧吉田家住宅

紫雲閣

※現在紫雲閣は公開していません※
 令和 5 年 3 月末まで（予定）修繕工事を行っています。

❖吉田家と建物の歩み

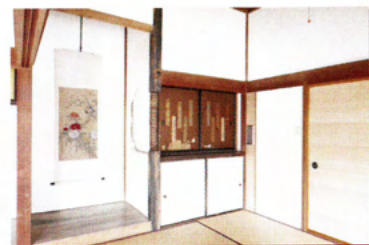
旧吉田家住宅主屋および紫雲閣は、生糸商人の吉田誠次郎（せいじろう）が建てた建物です。誠次郎は、田村郡駒板村（現郡山市中田町駒板）の吉田常三郎の次男として生まれ、三春町中町の商人・釜屋宗像善吾の次女と結婚して養子となりました。善吾は「三春駒」の商標を取得して三春生糸のブランディング化に成功、東京や横浜で生糸商を行いました。誠次郎は明治 28 年に分家して独立、その後生糸問屋として取引し、外国人向けに錦絵や書画、骨董の販売を行い、金融業も営んだことで、一代で財を築きました。
 誠次郎は、分家を機に居宅を新築しました。商いの過程で得た建物に関する優れた意匠や造作、希少な銘木などの知識を活かして、主屋や土蔵、離れなどを建築しました。特に離れは、隣接する紫雲寺に由来する「紫雲閣」と呼ばれ、誠次郎の趣味であった謡曲の練習や披露の場として眺望の良い高台に建てられるなど、誠次郎の拘りが詰まった建物が建築されました。
 平成 6 年に敷地内の建物全てが三春町に移譲され、各種改修工事を経て平成 10 年に「三春町文化伝承館」という公民館施設として開館し、内部公開が実施されました。



明治 42 年撮影 吉田誠次郎らが写る

旧吉田家住宅主屋

贅を尽くした銘木の館



次の間



小檜の奥に棚

❖奇抜な意匠と隠された棚

客間と次の間は、二間続きの部屋として用いられました。次の間の床飾の奇抜さが目を引き、上下の黒柿の床柱は、はつり仕上げを施し、その間にシュロの木が利用されます。また、襖の中には黒柿の天袋が隠されており、当初は黒柿を多用した床飾でしたが、後に改造して現在の奇抜な姿になったと考えられています。



はつった黒柿の床柱



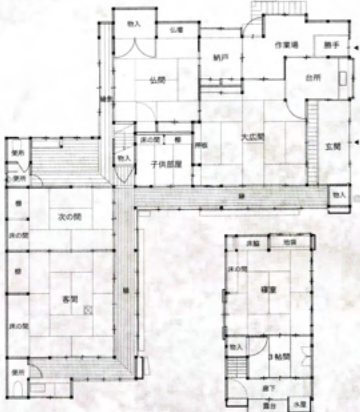
唐木三大銘木 床柱の高級木材紫檀に刻みを入れる

❖唐木揃い踏み

客間の座敷飾には、高級木材である唐木三大銘木が用いられています。床柱には紫檀(したん)、床框には黒檀(こくたん)、落とし掛けには鉄刀木(たがやさん)が用いられ、フローリングのように用いられる連棚の鉄刀木の地板は、他では見られない稀な用法です。

旧吉田家住宅主屋平面図

※改修前の姿。部屋名称は家相図を参照。



1階

2階

黒柿の断面



❖神秘的木材「黒柿」

主屋と紫雲閣には「黒柿」がふんだんに利用されています。黒柿は、伐採した際に偶然黒く変色した木目が見つかった柿の木で、外見では判りません。なぜ黒く変色するのは未だに解明されず、神秘的木材といわれ、一説には樹齢100年以上の柿の木で、1万本に1本しか採れない大変貴重な材料といわれています。希少性の高い神秘的黒柿を豊富に利用する吉田家の建物は、貴重な遺構といえます。



押板に黒柿



花頭窓と帳台構を模した神棚と押入



大広間

❖人を迎える押板

床の間より奥行が浅い押板(おしいた)は、床の間の原型の一つとされ、民家や町家の日常の居所に利用されました。ここでは、高級木材の黒柿が利用され、華やかさを感じます。また、神棚は花頭窓風で、その下には帳台構(ちょうだいがまえ)風の襖が設置され、居室としての機能性を持ちながら、客人を迎えることができる品のある部屋となっています。

子供部屋



薩摩杉の天井



材料に拘った子供部屋

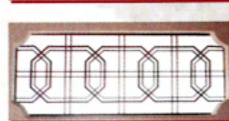
❖落ち着いた子供部屋

子供部屋には似つかわしくない、座敷飾や天井があることに驚くと思います。床柱に楓(かえで)、床框に桐(くぬぎ)、天袋に黒柿、天井に節つきの薩摩杉を利用します。これほどまでに凝った造りになったのは、以前は電話室とも呼ばれた公的な性格の部屋だったからです。

❖モダンデザイン



1階客間欄間



1階次の間欄間



2階寝室障子

❖繰り返される意匠



主屋2階寝室天袋



紫雲閣1階座敷天袋



1階子供部屋欄間



紫雲閣雨戸空気口



紫雲閣2階廊下引手「月」

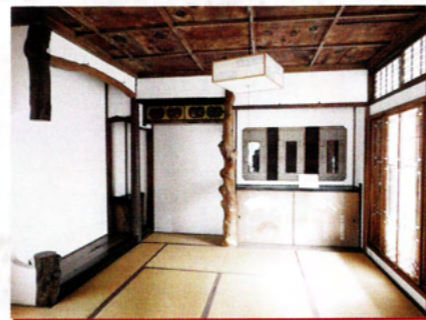


紫雲閣2階廊下引手「兎」

主屋と紫雲閣には、大変凝った造りの建具が数多くみられ、職人の確かな技術と近代建築ならではの美しくモダンなデザインが採用されています。また、共通した意匠やモチーフがいたるところで確認でき、部屋のコンセプトに合わせたデザインが見られます。

❖唐木三大銘木 紫檀・黒檀・鉄刀木

「唐木」とは東南アジアを原産とする木材の総称で、遣唐使によって唐(現在の中国)をから日本に入ってきたことから、唐木(からき)と呼ばれています。唐木には、黒檀(こくたん)、紫檀(したん)、鉄刀木(たがやさん)、白檀(びやくだん)、花欄(かりん)などがあります。なかでも黒檀・紫檀・鉄刀木は、唐木三大銘木といわれる大変貴重で高価な木材です。現在は輸出制限などもあり、建築に豊富に利用することは難しくなりました。唐木三大銘木が揃い踏みする姿は、贅を尽くした銘木の館といわれる所以の一つです。



寝室・3帖間

❖銘木の交差点

寝室は、多くの銘木が利用されています。鉄刀木や紅葉の柱、黒柿の床板、栗の埋もれ木の一枚板、楓の落とし掛け、節つき薩摩杉の格天井。一つの部屋にこれほど多種の材料を多様な形で用いる建物は類をみません。



鯉口を模した取手



龍をモチーフとした欄間



薩摩杉の格天井



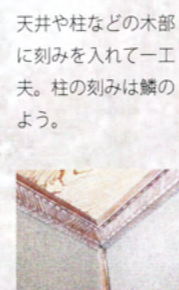
円窓と椀

❖変木の茶室

茶室は、大きな円窓を設けて陰陽を表現し、土壁に反故紙(ほごがみ)を貼って詫びを表すなど、伝統の中にも施主の工夫や拘りが感じられる草庵風の茶室です。三又に分かれた3本の柱の変木が特徴で、自然の美しさを表現しています。亀の彫り物や欄間の彫刻は買い付けたものと考えられ、部屋のコンセプトに合わせて美しく配置されています。



節を活かした柱



天井廻り縁



天井竿縁



黒柿に刻み

紫雲閣

意匠の限りを尽くした離れ座敷



紫雲閣2階・漆の間

❖中国意匠と宇宙の表現

漆の間は、龍をモチーフとした彫刻や意匠が数多くみられる中国趣味のお部屋です。床の間の龍の彫刻は、横浜や東京の博覧会で買い付けたものとされ、部屋の大きさに合わせて彫刻が継ぎ足されています。昇り龍の先には天井に雲が描かれて宇宙を表現します。また、内装は木部を一切見せず、三春漆の磯草模様や津軽塗の唐塗など、10種類程度の漆が用いられています。誠次郎は謡(うたい)が趣味であったことから、音が反響するよう漆が塗られました。



施主の想いと機能が詰まった部屋



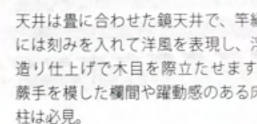
建築当初はベランダで手摺付 朱塗の彫刻は改造 木部は全て漆塗り

紫雲閣1階・座敷



❖繋がるデザイン

紫雲閣1階の座敷には、主屋や紫雲閣2階の部屋と共通するデザインや同じ材料がたくさんみられます。施主の拘りを探してみてください。



天井は雲に合わせた鏡天井で、竿縁には刻みを入れて洋風を表現し、浮造り仕上げで木目を際立たせました。藤手を模した欄間や躍動感のある床柱は必見。

